

その 3

鬼病とコロナ・パンデミック



壹岐の嶋に至りて、雪連宅満の忽(には)かに鬼病(かみのやまひ)に遇(あ)ひて死去(みまか)りし時に
作れる詩一首并せて短詩

「天皇(すめろぎ)の 遠(とほ)の朝廷(みかど)と 韓国に 渡る我が背は 家人の 斎(いは)ひ待たね
か 正身(ただみ)かも 過ちしけむ 秋去らば 帰(か)りまさむと たらちねの 母に申して 時も過ぎ 月も経ぬ
れば 今日か来む 明日かも来むと 家人は 待ち恋ふらむに 遠の国 いまだも着かず 大和をも 遠く
離(さか)りて 岩が根の 荒き島根に 宿(とど)りする君」

(天皇の 遠いお使いとして 韓国に 渡る貴君は ご家族が 物忌みして待たれていないからなのか
本人が 不注意だったのか 秋になったら 帰(か)って来ますと (たらちねの) 母者に申して出京した後
時も過ぎ 月も経たので 今日(けふ)は帰るか 明日(あした)は来るかと ご家族は 待ち焦れておいでだろうに 遠
い韓国へは いまだに着かず 大和をも 遠く離れて 巨岩のような 荒い島に 旅寝(たびね)する君よ)

作者未詳(巻 15・3688)

与能奈可波 都祢可久能未等 和可礼奴流

君尔也毛登奈 安我孤悲由加牟

「世の中は 常かくのみと 別れぬる

君にやもとな 我(あ)が恋(こ)ひ行(い)かむ」

(人生(じんせい)というものは いつもこんなものとして 死(し)んでいった

君(きみ)を無性(むじやう)に わたしは恋(こ)い慕(たの)みいつつ行(い)くのか)

作者未詳(巻 15・3690)



壹岐の島

令和の新時代は、かつてなら疫病と呼ばれた新型コロナ・パンデミックとともに始まったと言って過言ではない。そして、奈良時代、天平の世も疫病の大流行に苦しんだ。万葉集は当時の疫病を記録していた。万葉集では、疫病を鬼病と書いて「かみのやまひ」と呼んで怖れた。万葉集に残されたこの歌は、新羅に派遣された遣新羅使人（けんしらぎしじん）の1人で、鬼病で死んだ雪連宅満（ゆきのむらじやかまる）という人物を悼んだ挽歌である。宅満は、道半ばにして倒れ、吉岐の島で没したのだった。その際、使節団の一人が、宅満の最期の言葉を聞き取り、歌に詠み込んだもの。愛する人を思いながら死んでいく悲しくも潔い歌である。そもそも鬼病は、当時大陸との窓口であった太宰府から発生し国内に感染したとされている。平城京から太宰府を経て新羅に向かった遣新羅使たちは、宅満だけではなく、帰路には団長である大使など多くの使人たちが旅の途中次々死亡、平城京に持ち帰った鬼病により、朝廷もクラスターとなり、時の政権の中枢を襲う。藤原四兄弟の武智麻呂（むちまろ）、房前（ふささき）、宇合（うまかい）、麻呂が相次いで死亡。天平の鬼病は、現在では天然痘が原因とされるが、推計によると、日本全国の死者数は、当時の総人口の25～35%、約100～150万人に達したというから、今回の新型コロナウイルスによる全世界の死者数に相当する大惨事だった。天平のパンデミックと言っても過言ではない。天平という元号は、天下泰平を願ってつけられたとされるが、その真逆、まさに国家の危機だったのである。



この未曾有の事態を乗り越えようと苦闘したのが聖武天皇だった。仏教の教えを取り入れた国造りを進め、全国各地に国分寺、国分尼寺を設置、墾田永年私財法を制定して開墾した土地は永久に自分のものとするを認めるなど、いくつかの社会改革に取り組む一方、いまのロックダウンに代わるものか、疫病や反乱から逃亡するため5年間に3回もの遷都を行う。また、国家の安泰を願って、東大寺に盧舎那仏、つまり当代一の大仏建立を発願する。しかし、この疫病やそれによる飢饉等のため大和の国は困苦にあえぐことになるのだが、その後、つまり、鬼病大流行の後、この大仏の他、数多の仏像彫刻

や仏教寺院が建設される等仏教文化を中心とした、いわゆる天平文化が華開くのである。また、苦難の道乗り越えて帰国した遣新羅使や遣唐使がもたらした文化、文物は、シルクロードの終着駅として奈良の都で国際色豊かな文化となって結実する。まさに、「あをによし 奈良の都は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり」（小野老 巻 3・328）の世界である。その時代の遺産の数々が正倉院として今に残ることになる。



正倉院

それに匹敵する天平文化最大の文化遺産が万葉集であると言って過言ではない。鬼病が猛威をふるった時期、20代になって間もない家持は朝廷で内舎人として聖武天皇に仕え、多くの女たちと相聞歌を交わすなど歌人としても旺盛な活動を始める。太宰府では梅花の宴に列席した大宰大貳小野老が疫病死している。高岡万葉歴史館坂本信幸館長は、柿本人麻呂と並んで歌聖とされる山部赤人も、その時期歌の記録が途絶えることから鬼病で死んだのでは、と推測する。

さて、天平パンデミックという国家存亡の危機を乗り越え、奈良時代のレガシーとも言うべき天平文化が残されたことに、今私たちは目を向ける必要がある。疫病の大流行がきっかけとなり、その後東大寺大仏や正倉院、そして万葉集等が生まれているのだ。万葉集は、家持が最終的に編纂したとされているが、そもそもは聖武天皇がその詔を発したとする聖武天皇勅撰説も根強くある（この場合の詔は、まぎれもなく上から下への「勅令」だが、前述の特攻出撃の「令」とはまったく質が異なるだろう）。そのような国難の中でも歌は生まれ、生き残り、いずれ万葉集として生まれ出る数多の種子を孕んでいたのである。

翻って現代、コロナ禍により社会、経済が疲弊し、文化、芸術が衰退の危機にある今、ポストコロナをめぐって、新しい社会、経済、文化のあり方が問われている。そんな今こそ万葉集は今後のあり方を考える手がかりになるかもしれない。何より、万葉集には、人を愛し、身近な草花を愛で、豊かな自然や四季を愛おむ日本人の原像が詠み込まれている。古を振り返り、今を見つめることで、これからの新しい生き方をさぐるための手立てとなることは間違いないだろう。

この物語の主人公大伴家持は、この天平パンデミックの前後から歌作りに取り組み始める。この時期家持も1人子をなした妾（をみなめ）、妻をめとる前にめとった妾を失っている。生前は1首も恋歌を贈ることはなかったが、この時嬰兒を残して逝った妾に切々たる亡妾挽歌13首を詠む。妾の死と鬼病の大流行を乗り切った後は、妻となる坂上大嬢（おおいらつめ）やその母で叔母の万葉を代表する女流歌人坂上郎女他年上女性も含め20人近い女たちと相聞歌をやり取りすることになるが、そんな恋多きレディキラー、若き家持を相手に、1300年の時空を超えてリモートトークするのも悪くない。

家持ナウ……コロナ禍のための巣ごもりの時間、万葉集をひも解き、まずは家持の相聞歌から読み始めるのも面白い。家持の相聞歌と言っても、家持自身の相聞歌は少ない。妻となる坂上大嬢やその母で叔母にあたる大伴坂上郎女との間では多くの相聞のやり取りがあるが、それを除くと、他の女たちからの恋歌を贈られても、家持本人からの返歌はあまりない。恋歌を5首ももらいながら1首も返してないとか、例えば、笠郎女の場合は、29首もの熱い恋歌を贈られても、家持からは、笠郎女が都を離れて田舎に帰ってから、なんとも素っ気ない2首を贈るのみ。女たちの片思いで（坂上郎女には、家持への強烈な片思いの恋歌がある）、家持は、それほどモテモテだったのか。それとも編集者の特権で、自分の相聞歌はカットし、お相手の女性の歌だけ多く残したのか。いずれにしても、家持はもとより、豊かな才能と激しい恋情を抱えた、多くの魅力的な万葉の女性と出会うことで、これまでにない情動を抱くこと請け合いである。もしかしたら、生誕1300年記念で現世に呼び戻し、現代に甦った家持や坂上郎女たちに巡り会えるかもしれない。2018年の大伴家持生誕1300年記念事業の一環として、高岡と鳥取の舞台に家持たちを甦らせることになるが、それは後の話である。



（写真中央）
大伴家持 和泉元彌
坂上郎女 紺野美沙子
2019年3月 鳥取
（撮影）中村光江